

# From the World Conference

## 日本脳神経外科学会 第77回学術総会

2018年10月10～13日 日本・仙台

石原 秀行 山口大学医学部脳神経外科講師  
鈴木 倫保 山口大学医学部脳神経外科教授

日本脳神経外科学会第77回学術総会が、東北大学大学院神経外科学分野教授の富永悌二先生を学会長として、仙台国際センターにおいて2018年10月10日～13日の4日間にわたり開催された。メインテーマは“社会の変革と脳神経外科”であり、特別企画として、「脳神経外科における研究の現状と展望」「変革を迫られる脳神経外科の医療体制・ヘルスケア」「超高齢者の脳神経外科医療：QOL&Dからの再考」「脳神経外科診療におけるゲノム医療」など、急激な社会変化や急速な進歩を遂げている技術革新に伴い、脳神経外科がどのように変わりつつあるかを実感させられるプログラムが構成されていた。

日本脳神経外科学会のなかで、抗血栓薬、特に直接作用型経口抗凝固薬(DOAC)は、脳内出血に関連

した分野における重要なテーマであり、一般口演とポスターセッションにおいていくつかの興味深い発表があった。

DOACが脳内出血を減らしているかが1つの興味であるが、脳内出血患者に占める抗凝固薬内服中患者の割合は、DOAC登場以前の2004～2011年は9.2%であったのに対し、2012～2018年には24%に増加していたことが名古屋第二赤十字病院脳神経外科 松野宏樹医師から報告があった。他施設からも徐々に抗凝固薬内服中の脳内出血が増加しているとの報告があり、年齢の高齢化と抗凝固薬内服患者の増加が要因と考えられた。

また、DOAC内服患者の脳内出血の特徴も1つのトピックスであり、浜松医療センター脳神経外科 中山禎司医師から、抗凝固薬を内服していない症例に比べ抗

写真1 大ホールでのシンポジウムの様子



写真2 会場の仙台国際センター

